

1次産業

Primary industry

地形も気候も異なる挾間、庄内、湯布院の3町が合併した由布市では、ナシ、米、野菜、酪農など幅広い1次産業が営まれている。全国有数の観光地の豊かな自然を守るという誇りを抱き、地元が潤う農業を目指す若手生産者たちが、由布市の未来を本音で語り合った。

おきて

掬ぶつ壊しもうかるう



由布岳と田園風景

農業の今後見つけたい

直野 今日は由布市農業の今後につながる何かを見つけたらと思います。私は文化科学部のデスクをしています。由布市勤務の経験はないので勉強させてもらいたい。まずは自己紹介を。

竹内 湯布院町塚原で酪農と「みるく村」というお店を営んでいます。5年前、地域活性化を目的にした若手組織「九十九(つくも)」もつくり、会長をしています。

甲斐 担当は営農指導。今日はいろいろな話ができたらと思います。

万 イオン九州光吉店で野菜果物の主任を務めています。農業は皆さんの方が詳しいので、少しでも力になれば。

高田 湯布院で稲作をしています。もともとは建設業でしたが、金融危機などで厳しくなり、7年前から農業に取り組んでいます。「由布市わくわく農業会議」は湯布院、庄内、挾間の3町の若手農家の集まりで、県外に由布市の野菜などを広めてがつつりもうけてやろうと楽しく活動しています。

竹林 庄内町で、多品目の有機野菜作りをしています。

高齢者の経験を強みに

直野 甲斐さんから由布市農業の概要を。

甲斐 由布市は湯布院、庄内、挾間の3町が合併しましたが、それぞれ気候が違い、いろいろな分野の農業が行われています。庄内のナシは日田に次いで県内2番目の産地です。生産額で一番多いのは米ですが減少傾向で、野菜も同様、畜産業は牛の値上りかで少しずつ増えています。問題点は他の市町村と同じで、高齢化



若手リーダー
由布市役所農政課営農指導員
甲斐敏春 さん

と後継者不足。農家数は減り、耕作放棄地も非常に増えている。

直野 高田さんは建設業の傍ら農業を始めたということですが、当初の苦労は。

高田 建設業は親父の代からですが、10年ほど前から公共事業が全くなくなった。従業員を解雇するところまできた時、今の時期でしょうか、何人も「稲刈りで休ませてくれ」と言うのを聞き、会社として米作りをすれば解雇しなくすむのではと始めました。米は単価が安く、簡単に収益が上がりません。最初は売れませんでした。いろいろと工夫して全国の大会で賞をもらう米を作れるようになり、値上がり、収入が増えました。

直野 米のおいしさを競う全国大会「米・食味分析鑑定コンクール」で特別賞などを取ったんですね。

高田 海外を含め、出展が4千件を超える大会で、本大会にノミネートされるだけでも大変。受賞を重ねたダイヤモンド褒賞の生産者の米ともなると、30%が10万円超え。しっかりともうける姿を見て、自分もそうなりたいたいという夢を持っています。米の作り方や、苗植えや稲刈りに適した時期は近所のおじいちゃん、おばあちゃんに習いました。米は1年に1回の収穫。高齢化が進んでいますが、豊富な経験を聞けるのは強みです。

地域をまず大事にする

直野 竹内さんはユニークな経歴をお持ちです。

竹内 祖父が開拓者として入って私は3代目。父が親牛40頭規模の牛舎を建て、私は高校3年生の時に「みるく村」、今いて6次産業の構想を考えました。工業系の高校に通っていましたが、父が観光農業を目指すのを見て農業の広がりにつ

れ、農業大学校に進みました。ハム・ソーセージなど食肉加工についても学び、観光と料理を学ぶために由布院の旅館で板前修業もしました。酪農家は一日ずっとその地域にいる職種なので、まず大事にしないといけないのは地域だと思い「九十九」をつくった。現在は観光やサラリーマン、介護などいろいろな業種の人が集まり、30人で活動しています。

直野 牛乳は全量を九州乳業に出している。
竹内 数%はお店で扱っていますが、塚原の酪農家の成分が評価されて、「ゆひんの薫り」という九州乳業のブランド商品として売られています。
高田 おいしいから、もっと単価を上げていいと思う。
竹内 県酪(大分県酪農業協同組合)の一つの組織なので、あまり格差をつけられないんです。
竹林 個人でブランドをつくるのは難しいんですか。

竹内 4千万〜5千万円の投資が必要。日持ちもしないし、流通を自社だけでまかなうのは難しい。
高田 新規参入が難しいですね。
竹内 酪農は乳価が上がりません。もうけにつながらない。学校給食や家庭に安価で栄養豊富な牛乳を安定的に供給しているという誇りは持っています。牛乳は物価安定品目で生活の基盤になる作物なので、安易に値段を上げると他の物価も上がる。国レベルの値段設定なので責任も感じています。

高田 消費者に生産者の苦労は伝わりにくい。安くておいしく食べればよくて、生産者の熱意は二の次なのかと思う時があります。

さんざん反対をされた

直野 ところで竹林さんは千葉県出身ですが、



若手リーダー
塚原若手の会九十九(つくも)会長
竹内秀馬 さん

竹林 大分とのゆかりと言えば県南に夫の実家があったことくらい。研修で宇佐市や湯布院町などを巡り、やっと庄内町に落ち着けそうな畑を見つけた。夫婦とも農家出身ではなかったのに、さまざまな農家で研修しましたが、「やめとけ」「離婚するぞ」という話をさんざん聞かされた(笑)。有機農業で経営が成り立っている研修先を見て、面白いかなと始めました。年間40品目作っていますが、今は少量多品目より、メーンを多めに作る方向で取り組んでいます。地産地消の一環で学校給食に野菜を出すこともあります。

直野 有機で40品目作るのは大変そうですね。
甲斐 もともと農業をしている人なら考えないと思う(笑)。手が回らない。

竹内 最初に庄内に畑を借りるのは大変じゃなかったですか。

竹林 今の土地に落ち着くのに3年かかりました。

土地探すのが難しい

万 新規就農する時に農家でない人は土地を買えませんが、どうやって取得するんですか。

竹林 私たちは偶然、不動産屋が空いている畑の持ち主と話をしてくれました。

甲斐 新規就農を促しつつ、農地は農業をしている人じゃないと売らないとか、人を呼び込もうとする方には厳しいし、ばりがあります。新規就農者のほとんどは借地から。空いている農地を貸したい人が登録している農地バンクがありますが、トラックもコンバインも入らないような凹凸な土地も多くて。

高田 農業に関して言えば甘えてるんじゃないかと思う。土地の紹介とか補助金とか。例えば店を開こうと思えば自分の足で不動産屋を回り、現

地の人通りを見に行ったりしますよね。新規就農者の説明会で若い人と話をしていたら、役場がサポートしてくれるのか、住む場所は世話してくれるのかといった声があつて。「業」がつく以上、「商」だと思うんです。自分の会社をつくるという意気込みでないと絶対もうからない。

竹林 ただ実際、新規就農者が土地を見つけるのは難しいです。

万 大分にゆかりがない人は、何らかの支援がないと、知らないことも多いですし。

高田 まづ農家に就職してノウハウや人脈をつかみ、地域で顔を売ることからはではないでしょうか。

竹内 農地はその地域で一反いくらと価格は一律ですが、その中でも道路から近いとか平らとか優劣がある。そういう地域の一等地を使える人は、何年も地域づくりに取り組んできた人。新規就農者も土地を「借りた」ではなく「持った」という覚悟で地元と一緒に地域を守る作業に頑張れば、応援してもらえるようになると思う。

竹林 スタートする土地を市が紹介してくれたらいいなと思います。

甲斐 相談者には、由布市の中でも「湯布院がいい」という人が多い。湯布院というブランドを使うためですが、ほぼ水田で気候的に作る物が限られる。新規就農者は夢を持って話しますが、そんなに甘くないよという話は最初します。もうかるかどうかは自己責任。努力は必要です。

直野 観光と農業の連携は、皆さんと事前にお会いした時に、旅館やレストランとの連携がうまくいっていないとお聞きしました。

竹内 一般の旅館はできる限り地産地消をうたってサービスを上げようとしている。一方、低価格で湯布院を楽しんでもらおうと販売をしている旅館や地元の飲食業は、できる限り安い物を使おうとするので、ブランド化ですべての素材の値段が上がると使いつらくなる可能性がある。由布市の農業はブランド化と、一定の価格で供給できるという二極化した取り組みが必要だと思います。

高田 湯布院の名前だけで売れるのではなく、本当にこだわって作っているところが生き残ると思う。

持ち帰りやすい加工品

直野 地元の農産物を湯布院観光の中で食べてもらおうという思いはあります。

竹林 湯布院全部の宿泊施設に届けるのは量的に難しい。それに、旅館の要求するものはサイズや見た目が厳しいケースが多くて。

竹内 板前の経験があるから分かりますが、野菜を切る時、形の悪いものは時間がかかる。素材の形はそろっている方が切りやすいですね。

甲斐 市場と違って、地産地消には頼んだ物がそろわないリスクもある。曲がった野菜をカットするような1次加工の組織があればいいと思いますが、由布市にはまだありません。

高田 い、話ですね。お金の匂い、かする(笑)。

竹林 時代は手軽さを求めていますし。

甲斐 スーパーにあるようなサラダ用のカット野菜は、給食センターからも要望がある。カット野菜で届けば調理時間の短縮になり人件費が節約できる。カット野菜の方が価格は高いので、農家も高く売る努力が必要だと思います。

高田 よく「農業はもうからない」と聞きますが、利益でうまくうように変えるしかない。「業」なら利益を出さないと。

直野 どうしたらブランド化して地域が潤う仕組みができそうですか。

高田 フランスのワインもトップブランドのワ

インがある地方のワインは高くなる。「大分の湯布院の高田さんのお米」になりたいなど。「あの人がいるところだからおいしい」とか、「どうやってあいつはもうけているのか」と競う努力につながると思うんです。努力を促進できるようになった時にブランドができるのでは。

甲斐 農産物をそのまま売っても観光客は買いつらい。由布院駅前から湯坪街道につながるにぎわうエリアに、農産物を2次加工した持ち帰りやすい商品を作るのも一つの手。全国から人が来るわけですから、あとは何を提供するかです。

スマートIC起爆剤に

竹内 由布岳パーキングエリアにスマートインターチェンジ(IC)が開設するのはいま来年。

甲斐 あれはすごいチャンスですね。

竹内 湯布院は高速が通行止めの時は別府行きの通り道になっているので、大渋滞で地元の人は生活しづらい。スマートICの完成で塚原が観光の起爆剤になればという産業的な面と、地元が暮らしやすくなってほしいという思いがあります。

甲斐 あそこで観光農園もできたらいいですね。
竹内 将来的には塚原に、由布市すべての産物を集めて買物ができる道の駅をつくりたい。高速道路を活用でき、アフリカンサファリや城島高原ともつながるエリアとしてのメリットがあるので、売れる農産物が育てば、塚原で農業をしようという後継者が出てくるかもしれない。

高田 湯布院に来る観光客は日帰りが多いが、湯布院の田園や塚原の高原風景を巡るとか、時間をかける滞在型の観光スタイルになれば、農産物を消費する人も増えるはず。

竹内 稲作があるから湯布院の風景が保たれている。農業はPR素材の一つなのではなく、観光産業には1次産業が必要であるという認識を深めてもらい、お互いを思いやる関係になりたい。

高田 観光で収益を上げるなら、税金を一部の観光資源に使うのではなく、あせ道や水路、山の整備といった田園風景の維持や、塚原を展望する無料シャトルバスなどに使った方が湯布院のためになる。観光と農業がウィン・ウィンの関係にならないと。

万 話を聞いていて、もう一度皆さんでまの在り方を考え直す時期なのかなと思いました。それぞれすごい情熱をお持ちですから、それを表に出していった方がいい。

ライフセイバーの役割

直野 分科会のキーワードを考えたいと思います。

竹内 1次産業は地域や風景、生活を守っている「ライフセイバー」だと思っています。

竹林 1次産業と消費者の接点が多々ないので、結び付いて観光と発展できた方がいいですね。庄内もそこにもっとからんでいきたい。

万 高田さんのもうけは大切という話は正しいと思う。農業をするには人間性や地域貢献が必要という話も出てきました。キーワードは本音でいいのか、きれいにまとめるのか。

高田 農業と観光をぶつぷすで(笑)。

甲斐 既存のものを見直して、原点に帰るとい

うことですね。
万 「スクラップアンドビルド」という言い方も。

竹内 原点回帰の「回」を「壊」にしては。

甲斐 古くてもいいものは受け継いでいく。

高田 収穫して次の種をまくのと同じですね。農家らしくていい。

直野 「原点破壊」。それでいきましょう。

はじめた人がある。

つづける人がある。

じぶんは、

こうしてふさがっていくんだ。

ここちよい世の中をめざした、JTの取り組み

■あなたが気づけばマナーは変わる

たばこを吸われる方の喫煙マナー向上のために、「あなたが気づけばマナーは変わる。」というメッセージとともに、ポスター、喫煙所のステッカー等による呼びかけを行っています。

■ひろえば街が好きになる運動

「ひろう」という体験を通じ、「すていい」気持ちを育てたい。そんな願いから生まれたこの運動は、どなたでも参加できる清掃活動で、全国各地でこれまでに延べ160万人の方々にご参加いただいています。

■分煙コンサルティング

公共施設や商業施設、オフィス等、各施設の特徴や利用される方々のニーズに応じた「分煙コンサルティング」を実施。分煙方法についての知見提供・提案・アドバイスを行っています。

吸う人も

吸わない人も

ここちよい世の中へ。

喫煙マナーについてもっと知りたい方

“ひろ街”への参加に関心のある方

分煙を具体的に検討されている方

くわしくはこちらまで。

JTの取り組み

検索

日本たばこ産業株式会社 大分支店 社会環境推進担当 大分市新井1-10 TEL:097-552-7171 営業時間 平日9:00~17:40

JTメッセージ

豊かな味わいや香りを楽しんだり、リラックスしてひとときのゆとりを得たりと、世界中に愛用者がいるたばこ。大人の嗜好品として、長く愛されてきました。たばこを吸う人と吸わない人が協調する共存社会を目指すJTが、たばこのあれこれをご紹介します。たばこのこと、ちょっと考えてみませんか。

分煙社会の実現

「仕事の前に集中するための一服」「景色のいい場所での一服」など、その感覚はたばこを吸われる方なら思い当たることがあるのではないのでしょうか。会話に「句読点」をつくったり、場の緊張を解きほぐしたりと、コミュニケーションを演出する道具としても愛用されているたばこ。一方で、たばこを吸わない方にとって、たばこの煙はしばしば迷惑なものになることがあります。今、私たちは、たばこを吸われる方にとっても吸われない方にとっても、より快適な「分煙」環境の実現を推し進めています。分煙にはさまざまなカタチがあります。分煙のカタチを一つに決めてしまうのではなく、吸われる方にも吸われない方にとってもさまざまな選択肢が揃っていて、それらを自由に選べる環境であることが、より良い「分煙社会」であると、私たちは考えています。JTは、たばこを吸われる方と吸われない方が協調して共存できる社会の実現に向けて、大人の責任と選択でたばこを選んだお客さまが、マナーや吸われない方への配慮を忘れることなく、自分の愛するたばこを最大限に愉しんでいただきたいと考えています。今後も様々な取り組みを進め、たばこ事業を営む企業としての社会的責任を果たしていきたいと考えています。

吸う人も

吸わない人も

ここちよい世の中へ。